

Who ever reads a newspaper from cover to cover? Clearly almost nobody. There isn't time in a busy day, and not all the articles are equally interesting. All readers have their own personal tastes and purposes for reading, which cause them to turn immediately to whichever sections interest them, and to ignore the rest. Thus, most of the paper remains unread, yet you still have to buy all of it. (1997年 東大・前期)

東大前期の下線部和訳問題を取り上げるのはこれが初めてである。この年度の問題は今まで取り上げてきた英文に比べると内容も構文も相当に平易であり、この程度の英文和訳問題に歯が立たないまま入試に臨むようでは、東大を受験する資格はないといっても過言ではない。と同時に、第1問の英文要約問題や、第5問の下線部和訳の得点も期待できないと言える。ただし、難易度は年度によって著しく異なる。現在の東大入試では、一般的に言って英語で点を稼ぐことは必須の条件である。例外は文系で数学を得点源にできる人くらいだろう。配点の高いリスニングに時間を割いて確実に得点するためにも、個々の問題は迅速かつ正確に処理していかなければならない。となると、見た目の易しさを額面通り受け取る訳にはいかない。減点されない正確な解答を短時間に作成しなければならないからだ。その手応えを掴む最善の方法は、指摘するまでもなく、実際に過去問を解くことである。

下線部の前には解説を要するほどのポイントは無い。一応、ever が疑問(詞)を強調していることと、Whoever と1語で書かれることもあることを指摘しておく。from cover to cover が比喩的な表現であることは言うまでもない。

下線部の which 以下の構文が cause them to turn ..., and to ignore ... であることが掴めない人はまずいないはずだが、..., which cause them であって causes ではないことを見落とす人はいるはずだ。つまり which の先行詞は前文の内容ではなく、their own personal tastes and purposes for reading だということになる。意味的には大きな差はないが、関係詞を用いずに書き換えてみれば、その差は明確になる。...for reading, and it causes them と ...for reading, and they cause them の違いである。前文の内容を受ける代名詞は、常に単数形 (it/this/that) である。

いずれにしても、この場合、which 以下は無生物主語であるが、無生物主語をそのまま主語として訳しても、日本語の表現として問題ない場合もあるが、ここは公式的な訳出のパターンに従うとして、むしろポイントは先行詞を正確に把握していることを訳文でアピールすることであろう。いくら東大の問題が易くなったとはいえ、出題者がいくつか落とし穴を設けていると考えるほうが安全である。

このことに比べれば、whichever sections interest them=any sections that interest them は標準レベルの文法知識にすぎない (いわゆる複合関係形容詞)。

[全訳]

新聞を端から端まで読む人などはたしているだろうか。そんな人は皆無に近いことは明らかである。忙しい一日に時間的余裕はないし、またすべての記事が同じように興味を引くわけではない。読者にはみな新聞を読む自分自身の個人的な好みと目的があり、そうした好みと目的に従って[応じて]、どのような欄[記事/頁]であれ自分の興味を引く欄[記事/頁]には直ぐに目を通し、他の欄[記事/頁]は無視するのである。それゆえ、新聞記事の大部分は読まれないままになるのだが、しかし、それでも(人は)新聞を1紙丸ごと買わざるをえないのである。

※前にも触れたことだが、訳文中の[]による言い換えや()による補足は、訳文のヴァリエーションを示したものであり、原文にない限り、実際の答案では絶対にしてはならない。

One of the biggest problems with modern computers is that they follow all commands mechanically. Computers do what they are told to do, whether we meant it or not. Moreover, they cannot turn themselves on, nor can they ever begin something entirely new on their own. (1998年 東大・前期)

1点の減点も許されないレベルの問題だと言いたいところだが、基本的な構文とイディオムの組み合わせにすぎないように思われる背後には、やはり隠されているポイントがある。それが何かわかるだろうか。

Computers do what they are told to do, の what である。ごく当たり前に Computers do the thing which they are told to do, と頭の中で言い換えて日本語に訳せば、それで何の問題もないと思う人は、この程度の英文の内容が正確に読み取れていない。下線部の前の One of the biggest problems with modern computers is that they follow all commands mechanically と下線部中の whether we meant it or not のニュアンスなどまったく意に介していないのだ。しかし、たとえば、仮に前後に何の文脈も与えられていないとしても、Most parents do what they can do for their children. という英語を「たいていの親は、子供のためにできることをする」と訳して何の違和感も覚えない人は、本来、最難関大学受験生に求められる言語感覚に欠けていると言わざるをえない。「たいていの親は、子供のためなら自分にできることは何でもする」という訳が、正常な言語感覚から生じる日本語のはずだ。

この日本語は、Most parents do whatever they can do for their children. (=Most parents do anything that they can do for their children.) の場合にのみ求められる訳文だと思う人は、文脈次第で what=all that / anything that に相当することを知らなければならない。

nor can they ever begin something entirely new on their own. =and they can never begin something entirely new on their own, either. は言うまでもない。on one's own 「自分で、自力で」は必須のイディオム。

[全訳]

現代のコンピュータの最大の問題点のひとつは、あらゆる命令に機械的に従うこと [命じられたことはすべて機械的に実行すること] である。(それが)人間の真意であろうとなかろうと、コンピュータはしろと言われたことは何でもするのだ。そのうえ、コンピュータは自分で起動することはできないし、まったく新しいことを自力で始めることもけっしてできないのである。

※まことに残念ながら、というより信じられないことだが、英語を教える側の人間でも、この程度の文脈の解釈ができる人は皆無に近い。そのことは、諸々の問題集の解答・解説等を見れば一目瞭然である。学力低下はなにも生徒の専売特許ではないようだ。

たいへん辛辣なコメントになってしまったが、大学の出題者・採点者が学参書執筆者や予備校講師とはいささかレベルが違うことを願うばかりである。

He had crossed the main road one morning and was descending a short street when Kate Caldwell came out of a narrow side street in front of him and walked toward school, her schoolbag bumping at her hip. He followed excitedly, meaning to overtake but lacking the courage. What could he say to her? He imagined his stammering voice saying dull, awkward things about lessons and the weather and could only imagine her saying conventional things in response. Why didn't she turn and smile and call to him, saying, "Don't you like my company?" If she did, he would smile faintly and approach with eyebrows questioningly raised. But she did nothing. She made not even the merest gesture. (1999年 東大・前期)

前の数行の英文で文脈を把握することを省いて、いきなり下線部から訳して完璧な答案が書ける人はまずいない。

1行目～2行目の ...was descending a short street when Kate Caldwell came out... は when の前にカンマを打つのが本来の句読法である。...street, when Kate Caldwell came out=...street, and then Kate Caldwell came out に当たり、この when は通常、非限定用法[継続用法]の関係副詞で、先行詞は前文の内容だと説明されているが、このカンマが省かれるのはそう珍しいことではない。

3行目の her schoolbag bumping at her hip はいわゆる独立分詞構文(意味上の主語のある分詞構文)だが、前に付帯状況の with を置いてもよい。4行目の meaning と lacking が分詞構文であることは指摘するまでもないだろう。

この辺まで読めば大体の文脈は掴めるが、下線部の訳にも関わる文法上の最大のポイントは、次の What could he say to her? である。評論文や論説文にはまず出てこないが、小説・物語で多用される描出話法[中間話法]という表現形式である。

人称・時制は間接話法で、語順は直接話法の形を取るが、「話法」というのは広義の意味であり、省かれている伝達動詞は say や tell に限られる訳ではなく、think [say to oneself] や feel 等に当ることが少なくない。今回は What could he say to her? = He wondered, "What can I say to her?" = He wondered what he could say to her. である。

下線部では中間話法の中に直接話法も出てくるのでかなり紛らわしい。

Why didn't she turn and smile and call to him, saying, "Don't you like my company?" = He thought, "Why don't you turn and smile and call to me, saying, 'Don't you like my company?'" = He wondered why she didn't turn and smile and call to him, asking if he didn't like her company. ということになるが、この Why don't you ...? は「...しくれてもいいのに」のニュアンスであることは、はっきり訳に出さなければいけない。次のセンテンスも同様に中間話法だが、この文は仮定法過去と解される。したがって直接話法に書き換えても時制は過去である。仮定法はもともと本来の時制(直接法の時制)からずれているために、時制の一致の影響を受けないからである。

If she did, he would smile faintly and approach with eyebrows questioningly raised. =He thought, "if she did, I would smile faintly and approach with (my) eyebrows questioningly raised." =He thought that if she did, he would smile faintly and approach with (his) eyebrows questioningly raised. である。

she did の did はもちろん代動詞である。また付帯状況の with では、特に慣用的な表現では、所有格や冠詞を省くことがある。語彙のレベルでは my company だけが要注意。company=同席, 同行/交際(相手)である。

[全訳]

ある朝、彼が本通りを渡って短い坂道を下っていると、ケイト・コールドウェルが目の中の狭い脇道から現れて、学校の方に歩いていった。通学用の鞆が腰に当たって弾んでいた。彼はどきどきしながら、追いつこうと後を追ったが、追いつく勇気がなかった。彼女になんて言ったらいいんだろう。口ごもりながら授業や天気について退屈できこないことを言っている自分を想像したが、それに対してありきたりの返事をしている彼女しか想像できなかった。(彼女が)振り向いて微笑み、「学校まで一緒に行かない」と(僕に)声をかけてくれないかなあ、と彼は思った。もし彼女がそうしてくれたら、自分もちょっと微笑んで、いぶかしそうに眉を上げて近づいていけるのに、と彼は思った。しかし彼女は何もしなかった。その素振りさえ見せなかった。

3行目の her schoolbag bumping at her hip を bumping her schoolbag at her hip で訳すのは許容されると考えるが、「通学かばんをおしりにぶつけながら」(赤本)、「鞆を尻で跳ね上げながら」(青本)と hip を「尻」と訳すのは誤りであり、下線部訳であれば当然、減点される。hip を辞書で引けば直ぐにわかる程度のことである。

※この年度は相当に手強かったと思うが、東大は第5問の長文読解で小説やエッセイを出題するので、この機会に、描出話法[中間話法]を身につけておきたい。

Chance had been our ally too often. We had grown complacent, over-confident of its loyalty. And so the moment when it first chose to betray us was also the moment when we were least likely to suspect that it might.

* 「ただし, "it" の内容を明らかにすること」という指示が与えられている。

(2000年 東大・前期)

前年度に比べるとかなり平易な設問である。配点はあまり高くないとはいえ、確実に得点することが求められる。構文が纏めない人はまずいない(?)程度の英文であり、内容を正確に把握していることを採点官にきちんとアピールできるかどうかのポイントになる。訳文に凝る必要はまったくないが、一読しただけでは意味がよくわからないレベルの日本語では、当然のことながら満点はもらえないと考えるべきである。

語彙に関しては chance と ally はもちろん必須。complacent はレベルが高いが、over-confident of its loyalty がその言い換えであることを纏めれば、内容把握に支障はない。

下線部の it might=it might betray us は言うまでもない。他でも触れたことだが、suspect that ... ≒ think that ... と doubt that ... ≒ don't think that ... は絶対に混同してはいけない。ただし、今回は「疑う」という訳語を当てても意味は通じる。choose to V ≒ decide to V だが、「選ぶ/選択する」という訳語でもおそらく減点はされないだろう。しかし、仮に「"it" の内容を明らかにする」という指示がなくても、it first chose ... の it を「それ」と訳すのは最後の手段(逃げ)であることはわかるはずだ。また be least likely to V に対する「-する可能性が最も少ない」という直訳は、ぎりぎり日本語として通じる範囲内だが、本問では減点される「可能性が少くない」。

下線部には直接関係ないが、上述の complacent (≒ self-satisfied) と over-confident of its loyalty の言い換えは、over-confident の後にもカンマがあれば、complacent と over-confident が言い換え(同格)ということになるが、カンマがないことと、complacent about ... に対し、(over-)confident of ... なので、前述の解釈でよいだろう。ただし前置詞の使い方には相当に個人の癖があるので、over-confident が前後をカンマで挟まれていれば、complacent と over-confident の言い換えと解することになる。今回は下線部外だが、カンマを同格(言い換え)と取るか and の代りとするかは、これまで下線部和訳の頻出ポイントであった。同格と断定する自信がないときの処理方法は、カンマをそのまま読点に置き換えておくこと、つまり繋ぎ言葉になる助詞(「と、や、て」の類)を補わないことである。

[全訳]

それまで偶然[運]が私たちの味方をする[私たちに有利に働く]ことが多すぎた。私たちは自己満足に陥っていた[いい気になっていた]、(つまり)偶然は私たちに忠実なもの[忠誠を尽くすもの]だと自信過剰になっていた(のだ)。だから、偶然が初めて私たちが裏切る[見放す]と決めた瞬間は、偶然がそういうことをする[私たちが裏切る]かもしれないとは私たちが思いもしない瞬間でもあった。

Indeed, in the year 1000 there was no concept of an antiseptic at all. If a piece of food fell off your plate, the advice of one contemporary document was to pick it up, make the sign of the cross over it, salt it well — and then eat it. The sign of the cross was, so to speak, the antiseptic of the year 1000. The person who dropped his food on the floor knew that he was taking some sort of risk when he picked it up and put it in his mouth, but he trusted his faith. Today we have faith in modern medicine, though (1) few of us can claim much personal knowledge of how it actually works. (2) We also know that the ability to combat quite major illnesses can be affected by what we call "a positive state of mind" — what the Middle Ages experienced as "faith".

* 「下線部(1)については、it が何を指すか明らかになるように訳すこと」という指示が与えられている。(2001年 東大・前期)

1行目に antiseptic 「消毒薬」というあまり見慣れない単語が出てくるが、少しも慌てる必要はない。下線部まで6～7行あるので、文脈の把握にはそれほど影響しない。事実、「床に落とした食べ物を拾って食べる」話であることは直ぐに読み取れる。contemporary 「現代の/同時代の」は基本知識である。下線部(1)の直前の though は「もっとも ... だが」と、等位接続指的に訳し下げればよい。

下線部(1)のポイントは、やはり it が何を指しているかだろう。前のものを受けていることは明らかなので、述語動詞が works であることを踏まえて、どの語を受けているのか、それとも文の内容を受けているのかを判断することになる。単数形の語を modern medicine から faith in modern medicine, his faith あたりまで遡ってみると、下線部の it=直前の modern medicine 以外に解釈の余地はない、と言いたいところだが、it=faith in modern medicine と考えてもそれなりに意味は成り立つ。

一方、it=(we) have faith in modern medicine という解釈もそう簡単に退けることはできない。(we) have faith in modern medicine=(for us) to have faith in modern medicine ならば faith in modern medicine と意味的にはほとんど変わらないからだ。しかし、much personal knowledge of how it actually works まで視野を広げて見ると、personal knowledge という表現と最も自然に結びつくのは、やはり modern medicine ということになるだろう。

(ただし、下線部(2)の内容からすると、faith in modern medicine という解釈も簡単には捨てがたい。)

こうした判断をごく短時間に行なわなければならないとなると、この下線部は(あるいは出題者の意図をも越えて)相当な難問である。僭越ながら出題者の意図を忖度(そんたく)するならば、おそらくは it=modern medicine を前提に、medicine の訳語をひとつのポイントにしているのではないだろうか。もし antiseptic という単語を知っていれば、当然 medicine を「(医)薬品」と訳すことになるだろう。しかし、知っての通り medicine には当然「医学」の意味もある。そのどちらであるかを判断するのは実はなかなかの難題である。確かに「医学」の意味の medicine は常に不可算名詞だが、一方「薬」の意味の medicine が常に可算名詞という訳ではない。種類を言うときは不可算名詞が可算名詞になるというのはよくあることだが、名詞の可算と不可算は、冠詞と並んで、日本人には最も解りにくい英語の文法項目である。

たとえば, herbal medicine=the practice of treating illness using plants は常に不可算名詞だが, herbal medicine=medicine made from plants は可算名詞としても不可算名詞としても用いる。要するに, modern [traditional] medicine は「現代[伝統]医学」あるいは「現代の[伝統的な]医薬品」であり, modern [traditional] medicines ならば「現代の[伝統的な]医薬品」である。

したがって, 素直に読めば modern medicine を「現代の医薬品」と解するのが正しいことになる。ただし, 市販の学参書等では modern medicine を「現代の医学」と訳している。どちらが正しいかの判断は読者に委ねたい。

上記のポイントをクリアできたとして, もうひとつポイントは claim ~ をどう訳すかである。claim much personal knowledge of how it actually works → claim that we have much personal knowledge of how it actually works という言い換え(英文英訳)が頭の中でできるかどうか得点の分かれ目になる。

下線部(2)には, 特に訳しにくい単語はない。can はもちろん「可能性」の can である。構文上のポイントは what we call "a positive state of mind" と what the Middle Ages experienced as "faith" の同格だが, ダッシュで補足する形を取っている分, カンマの場合とは微妙なニュアンスの差がある。それをうまく日本語で表現できれば申し分ない。なお, what we [they] call ~ = what is called ~ (by us/by them) であることは言うまでもない。

[全訳]

事実[実は], 西暦1000年には消毒薬という概念はまったく存在しなかった。食べ物が皿から落ちた場合, 当時のある文書に書かれていた忠告は, 拾って, その食べ物の上で胸で十字を切り, 塩を十分に振りかけて, それから食べる, というものだった。十字を切るのは, いわば西暦1000年当時の消毒薬だった。食べ物を床に落とした人間は, それを拾って口に入れるとき, ある種の危険を冒していることを知っていたが, 自分の信仰を信じていたのだ。今日では, 私たちは現代の医薬品を信頼している。もっとも(1)現代の医薬品が実際にどのように作用[機能]しているのかを, 自分自身よく知っていると主張できる者はほとんどいない。(2)私たちはまた, 非常に重い病気と闘う能力が, いわゆる「前向きな心の状態」に影響されることがあることも知っているが, そうした心の状態は, 中世には「信仰」として体験されたものである。

I was wondering how on earth I was going to get through the evening. Saturday. Saturday night and I was left alone with my grandmother.

The others had gone — my mother and my sister, both dating. Of course, I would have gone, too, if I had been able to get away first. Then I would not have had to think about the old woman, going through the routines that she would fill her evening with. I would have slipped away and left my mother and my sister to argue, not with each other but with my grandmother, each separately conducting a running battle as they prepared for the night out. One of them would lose and the loser would stay at home, angry and frustrated at being in on a Saturday night, the one night of all the week for pleasure. Well, some chance of pleasure. (1) There was hardly ever any real fulfillment of hopes but at least the act of going out brought with it a possibility and that was something to fight for.

”Where are you going?” my grandmother would demand of her daughter, forty-six and a widow for fifteen years.

”I’m going out.” My mother’s reply would be calm and (2) she would look determined as I imagine she had done at sixteen, and always would do.

(2002年 東大・前期)

第五問でお馴染みとはいえ、登場人物の心理描写が絡むので、この種の読解が苦手な人にとっては、的確な日本語に訳すのはたいへん難しい。採点基準次第だが、満点を取れる人はごく一部だろう。明らかに現在の東大受験生のレベルを超えた、難問中の難問である。

下線部の前が長いので、文脈をおさえるために先に全訳を提示する。

[全訳]

私は、一体どうやってその晩を切り抜けようかと思案していた。土曜日だった。土曜の夜だったが、私は祖母と二人きりで家に残されていたのだ。

他の家族、つまり母と姉は、二人ともデートに出かけていた。もちろん、私が先に家を出ることができたならば、私も出かけていただろう。そうすれば、祖母のことを考えなくもよかっただろうし、祖母はいつも通りの夜の日課を過ごすことになっただろう。(私が先に家を出ることができたならば、) 私はそっと家を出て、母と姉が、二人の間ではなく祖母を相手に、言い争いをするのに任せていただろう。そうなれば、二人が夜の外出の支度をしながら、それぞれが別々に祖母と長い論争を続けることになっただろう。母と姉のどちらかが論争に負けて、負けたほうが家に残り、土曜の夜に家に居ることに腹を立てて失望するのだった。土曜の夜は一週間のうちで唯一楽しい夜だった。そう、楽しくなる可能性はあった。(1) 実際に願いが実現することはめったになかったが、しかし少なくとも、出かければ実現の可能性が生じるので、だから出かけるために戦うことになるのだった。

「どこに行くのよ」と祖母は、46歳で、15年前に夫を亡くした娘に問い質したものであった。

「出かけるの」母の返答は落ち着いていて、(2) その表情は毅然としたものだったが、私が想像するに(は)、母は16歳のときにすでにそうだったろうし、そしてそれ以来いつもそうだったのだろう。

[解説]

下線部の前

on earth: 疑問(詞)の強調で基本知識のうち。how I should be going to get through ... とほぼ同義。

the one 「唯一の」(the one and only のほうが強意的)

下線部(1)

hardly ever ≒ seldom

and that was someting... that=the act of going out (無生物主語)

下線部(2)

she had done=she had looked calm. would look determined / would do=would look calm と would が二度出てくるが、下線部以外にも would や would have p. p. が頻りに登場する。助動詞は英語の文法項目の中でも最もやっかいなものであり、特に will, would はそうである。これを完全に理解している受験生は皆無だろう。しかも変化が激しいのが英語の用法の特徴であり、一般的には、英語の教師といえども、受験生よりは詳しいという程度である。下線部(2)だけを取り上げても、would は過去の習慣的反復的行為[状態]を表すとも、過去の推量を表すとも取れる。さらには現在の推量を表すこともある。しかも過去の推量の場合には will have p. p. を用いることもあれば、would have p. p. を用いることもある。さらに前者は未来完了と同じ形であり、後者は仮定法過去完了と同じ形である。他でも触れたことがあるが、will の本質は推量であるが、それですべて説明がつくわけではない。ひとつには広義の仮定法が絡んでくるからだが、それだけではない。

as I imagine の as はいわゆる「様態」の as だが、「私が想像するところ」くらいの訳語は思いつきたい。

なお、下線部(2)の would について解釈が分かれるのはやむを得ないだろう。今回は構文に解釈の余地はないが、文法・構文の解釈が分かれる場合、最大の決め手は文脈である。問題の適否は別として、だから出題者は下線部の前に東大の下線部和訳問題としては長めの文脈を与えているのだろう。その文脈を読む力がないと、解説者自身が迷路に入り込み、したがって、受験生を迷路に誘い込むことになる。文法・構文の知識が重要であることを否定するつもりはまったくないが、いわゆる構文オタクというのは一般に内容が読めないことの裏返しにすぎないことが多い。

以下に赤本と青本的全訳と解答を提示しておく。波線部は誤訳であろう。

[赤本-全訳・解答]

私はその夜をいったいどのようにして切り抜けようかと思っていた。土曜日だ。土曜日の夜だというのに、私は祖母と二人きりにされたのだ。

他の者はみんな出かけていた。母と姉は二人ともデートだった。もちろん、一番先に出て行くことができなければ、私も出かけていたところなのだ。そうすれば、年寄りの相手をして単調な夜の過ごし方に付き合う羽目にならずともすんだのに。こっそりと抜け出して、母と姉に言い争いをさせておくことになったことだろう。母と姉が互いに言い合うというのではなく、二人とも夜に出かける用意があるものだから、それぞれが別々に長い闘いを繰り広げて、祖母と言い争うのだ。二人のうちのどちらか一方が敗れ、敗れた方は家にとどまることになるだろう。土曜日の夜に家の中にいるということに怒りと欲求不満を覚えながら。一週間で唯一楽しいことがある夜ではないか。いや、何か楽しいことが起きるかもしれない、という期待だけはできる夜だか

ら。(1)実際に望みがかなうことなどめったになかったが、少なくとも出かけるという
ことでその可能性は生じるわけだし、だからそれは争ってでも手に入れたいもの
だったのだ。

「どこへ行くんだい」と祖母は、未亡人になって15年になる46歳の娘に詰問したものだ。

「出かけるのよ」母の返事は落ち着いたものだったし、(2)母は、16歳の時にもそう
だったし、これからもずっとそうだろう、と私が想像するような、毅然とした表情を
していたものだ。

* (1) that=a chance という解説は誤りである。

* (2) 「これからもずっとそうだろう」は I imagined ならば would は時制の一致ということになるが、I imagine なので、仮定法過去(未来)ということになり、解説と矛盾している。

[青本-全訳・解答]

私は、一体どうやってその晩を過ごそうかと思っていた。土曜日。土曜の夜で、しかも、家に残っているのは私と祖母の2人きりであった。

他の者は既に出かけていた。母と姉、2人ともデートであった。もちろん、私だって、先に出られたのであったら、出かけていたかった。そうすれば、おばあちゃんのことで思い煩わされなくて済んだはずだし、おばあちゃんも、いつも通り晩の日課をこなしていたはずであった。私は抜け出して、母と姉が、2人の間でではなく祖母と口論して、夜のお出かけの支度を整えてそれぞれが勝手に追撃戦を展開するに任せてもよかったのであった。誰かが負けて、その負けた側が留守番役になるのであった。それも、土曜日の夜、つまり、1週間のうちで唯一の楽しい夜に、いや、楽しいものとなる見込みがある夜に、家に引きこもっていることに怒って失意の内に、(1)実際に願いが叶うということはほとんどなかったが、少なくとも、出かけさえすれば、可能性がついてくるのであり、だからこそ出かけるということは戦ってでも手に入れた
ことなのであった。

「どこへ行くのよ」と祖母は、46歳にして15年も寡婦となっている娘に問い質したものであった。

「出かけるのよ」母の返答は落ち着いていたし、(2)その表情は毅然としたものであったが、思うに、彼女が16歳の時に既にそうであったのであろうし、しかも、それからいつでもそうであったのであろう。

※これまでは書名も筆者も実名を挙げるのを極力避けてきたが、今回などはまだずっとまじなほうである。

Some people will find the hand of God behind everything that happens. I visit a woman in the hospital whose car was run into by a drunken driver driving through a red light. Her vehicle was totally destroyed, but miraculously she escaped with only a broken ankle. She looks up at me from her hospital bed and says, 'Now I know there is a God. (1) If I could come out of that alive and in one piece, it must be because he is watching over me up there.' I smile and keep quiet. (2) running the risk of letting her think that I agree with her — though I don't exactly. My mind goes back to a funeral I conducted two weeks earlier, for a young husband and father who died in a similar drunk-driver collision. The woman before me may believe that she is alive because God wanted her to survive, and (3) I am not inclined to talk her out of it, but what would she or I say to that other family?

* 「下線部(1)の that, (3)の it については、その内容がわかるように訳すこと」という指示が与えられている。(2003年 東大・前期)

前年度から一転して平易であるが、所々にいわゆる dramatic present 「劇的現在」が含まれている。日本語の表現ではざらにあること (...と彼女は言う=...と彼女は言った / それを聞いて彼女は泣き叫ぶ=それを聞いて彼女は泣き叫んだ) だが、英語では一般的ではない。ただし逆に日本語では過去時制のほうが自然な場合もある。下線部(3)がそうである。しかし求められているのは it の内容であり、下線部和訳としては現在時制で訳すことによる減点はまずないだろう。

原著は When Bad Things Happen To Good People で、『なぜ私だけが苦しむのか』というタイトルで翻訳出版されている。ただしこのパッセージは adapt されている。

[全訳・解答]

あらゆる出来事の背後に神の手が存在する、と考えようとする人もいる。私はある女性を病院に見舞うが、彼女の運転していた車が、赤信号を無視して交差点に突っ込んできた酒酔い運転のドライバーに衝突されたのだ。女性の車は大破したが、しかし奇跡的に、彼女は足首を骨折しただけで済んだ。病院のベッドから私を見上げて、彼女が言う。「今度のことで神が存在することがわかったわ。(1) もし私があの事故を無事に生き延びられたとしたら、神が天から私を見守っているからに違いないわ」(2) 私も(彼女と)同じ考えだと彼女に思わせてしまう危険を冒しながら、私は微笑んで何も言わない----もっとも私は必ずしも彼女と同じ考えではないのだが。私はその二週間前に自分が営んだ葬儀のことを思い出している。その葬儀は、同じような酒酔い運転のドライバーによる衝突事故で亡くなった、妻子のいる若い男性を弔うものだった。私の目の前の女性は、自分が生きているのは神が彼女が生き残ることを望んだからだと信じているのだろうし、(3) 私は彼女を説得して、彼女が生きているのは自分が生き残ることを神が望んだからだと信じるのを止めさせたいとは思わない。しかし彼女にしる私にしる、もう一方の、亡くなった男性の家族に何と云えばよいのだろうか。

[解説]

下線部(1)

If I could come out ... の could は文脈からして仮定法過去ではなく直接法過去である。そのことは、主節が it would have to be because ... でなく it must be

because ... であることからわかるが、他人ではなく自分の身に実際に生じた過去のことを if... で表すのは不自然だと思われるかもしれない。これは以下の説明で納得がいくだろう。

If he had succeeded, it would have been because he was diligent. (仮定法過去完了=実際には彼は成功しなかった)

If he succeeded, it was because he was diligent. (直接法過去=成功することも成功しないこともあり得たが、実際に成功した場合、その理由は彼が勤勉だったから)

If I had succeeded, it would have been because I was diligent. (仮定法過去完了=実際には私は成功しなかった)

If I succeeded, it was because I was diligent. (直接法過去=成功することも成功しないこともあり得たが、実際に成功した場合、その理由は私が勤勉だったから)

下線部(1) If I could come out of that alive and in one piece, の主節は it must have been because he was watching over me up there. のほうがわかり易いかもしれないが、it must be because he is watching over me up there. となっているのは、いわゆる「真理、社会的通念・諺」等を表す現在時制の使い方と同じである。
cf. if I could get over the obstacles, it must be because Cod helps those who help themselves. (諺)

that ≡ that (traffic) accident は見抜けなければいけない。

alive and in one piece は準補語。 cf. He returned safe.

in one piece 「無事に、無事で」は「五体満足で」くらいに訳すとおさまりがよいが、足首を骨折しているので少し無理がある。妙な訳語を当てるくらいなら省くほうがよいだろう。

なお、主節も含む下線部訳であれば「私があたの事故を無事に生き延びられたのは、神が天から私を見守っているからに違いないわ」くらいの日本語を求められるかもしれないが、If節だけということは、ポイントは come out of that alive and in one piece の理解にあると思われる。

下線部(2)

running ... 「...しながら、...して」に相当する分詞構文だとわかることがすべて。

下線部(3)

be inclined to V=feel like -ing / tend to V

talk a person out of -ing は talk a person into -ing 「人を説得して...させる」と共に必須のイディオム。

it=believing that she is alive because God wanted her to survive

下線部以外

5行目 now を「ねえ」と間投詞的に訳している青本は誤訳。

8行目 I don't exactly=I don't exactly agree with her で、not exactly ... (部分否定)「必ずしも...ない」だが、略式表現では「全然...ない」の婉曲表現の場合もあるようだ。下線部(2)と後ろのセンテンス my mind goes back to a funeral ... の内容からすると、後者の意にも思われるが、さらにその後の The woman before me may believe ... 以下の内容まで踏まえると、前者の意のほうが相応しいと思われる。もう少し広い範囲の抜粋であれば判断はもっと容易になるはずだ。

したがって、「実は全然そうではないのですが」という青本の訳を誤訳と指摘するのは控えます。

※当初は東大過去問を10年分は扱うつもりだったが、2004年以降は、分量にはかなりの差があるものの、難問の類は存在しないので、ひとまず7年分で切り上げます。